読む・百人一首081

後徳大寺左大臣

ほととぎす
鳴きつる方を
ながむれば
ただ有明の
月ぞ残れる

ほととぎす
なきつるかたを
ながむれば
ただありあけの
つきぞのこれる

読む・百人一首082

道因法師

思ひわび
さても命は
あるものを
憂きにたへぬは
涙なりけり

おもひわび
さてもいのちは
あるものを
うきにたへぬは
なみだなりけり

読む・百人一首 083

皇太后宮大夫俊成

世の中よ
道こそなけれ
思ひ入る
山の奥にも
鹿ぞ鳴くなる

よのなかよ
みちこそなけれ
おもひいる
やまのおくにも
しかぞなくなる

読む・百人一首 084

藤原清輔朝臣

ながらへば
またこのごろや
しのばれむ
憂しと見し世ぞ
今は恋しき

ながらへば
またこのごろや
しのばれむ
うしとみしよぞ
いまはこひしき

読む・百人一首085

俊恵法師

夜もすがら
もの思ふころは
明けやらで
ねやのひまさへ
つれなかりけり

よもすがら
ものおもふころは
あけやらで
ねやのひまさへ
つれなかりけり

読む・百人一首086

西行法師

嘆けとて
月やはものを
思はする
かこち顔なる
わが涙かな

なげけとて
つきやはものを
おもはする
かこちがほなる
わがなみだかな

読む・百人一首087

寂蓮法師

村雨の
露もまだひぬ
まきの葉に
霧立ちのぼる
秋の夕ぐれ

むらさめの
つゆもまだひぬ
まきのはに
きりたちのぼる
あきのゆふぐれ

読む・百人一首088

皇嘉門院別当

難波江の
蘆のかりねの
ひとよゆゑ
身をつくしてや
恋ひわたるべき

なにはえの
あしのかりねの
ひとよゆゑ
みをつくしてや
こひわたるべき

読む・百人一首089

式子内親王

玉の緒よ
たえなばたえね
ながらへば
忍ぶることの
よわりもぞする

たまのをよ
たえなばたえね
ながらへば
しのぶることの
よはりもぞする

読む・百人一首090

殷富門院大輔

見せばやな
雄島のあまの
袖だにも
濡れにぞ濡れし
色はかはらず

みせばやな
をじまのあまの
そでだにも
ぬれにぞぬれし
いろはかはらず

読む・百人一首091

後京極摂政前太政大臣

きりぎりす
鳴くや霜夜の
さむしろに
衣かたしき
ひとりかも寝む

きりぎりす
なくやしもよの
さむしろに
ころもかたしき
ひとりかもねむ

読む・百人一首092

二条院讃岐

わが袖は
潮干に見えぬ
沖の石の
人こそ知らね
かわく間もなし

わがそでは
しほひにみえぬ
おきのいしの
ひとこそしらね
かわくまもなし

読む・百人一首 093

鎌倉右大臣

世の中は
常にもがもな
渚こぐ
あまの小舟の
綱手かなしも

よのなかは
つねにもがもな
なぎさこぐ
あまのをぶねの
つなでかなしも

読む・百人一首 094

参議雅経

みよしのの
山の秋風
さ夜ふけて
ふるさと寒く
衣うつなり

みよしのの
やまのあきかぜ
さよふけて
ふるさとさむく
ころもうつなり

読む・百人一首 095

前大僧正慈円

おほけなく
うき世の民に
おほふかな
わが立つ杣に
墨染の袖

おほけなく
うきよのたみに
おほふかな
わがたつそまに
すみぞめのそで

読む・百人一首 096

入道前太政大臣

花さそふ
あらしの庭の
雪ならで
ふりゆくものは
わが身なりけり

はなさそふ
あらしのにはの
ゆきならで
ふりゆくものは
わがみなりけり

読む・百人一首 097

権中納言定家

来ぬ人を
まつほの浦の
夕なぎに
焼くやもしほの
身もこがれつつ

こぬひとを
まつほのうらの
ゆふなぎに
やくやもしほの
みもこがれつつ

読む・百人一首 098

後鳥羽院

風そよぐ
ならの小川の
夕暮は
みそぎぞ夏の
しるしなりける

かぜそよぐ
ならのをがはの
ゆふぐれは
みそぎぞなつの
しるしなりける

読む・百人一首099

順徳院

人も惜し
人も恨めし
あぢきなく
世を思ふゆゑに
もの思ふ身は

ひともをし
ひともうらめし
あぢきなく
よをおもふゆゑに
ものおもふみは

読む・百人一首100

祝部兵部卿

百敷や
ふるき軒端の
しのぶにも
なほあまりある
昔なりけり

ももしきや
ふるきのきばの
しのぶにも
なほあまりある
むかしなりけり